

読書のすゝめ

その33 H 31 1 / 24

本屋大賞ノミネート作品発表

1月22日、第16回本屋大賞のノミネート作品10作が発表されました。本屋大賞は、全国の書店員が投票によって、最も売りたい本を決める賞。今回は、第160回直木賞の候補となったことでも注目を集めた森見登美彦さんの『熱帯』や、深緑野分さんの『ベルリンは晴れているか』、発売までタイトルとヒントワードしか明かされていなかった伊坂幸太郎さんの『ラーガはユーガ』、マチネの終わりに』から2年ぶりとなる平野啓一郎さんの新作小説『ある男』などがノミネート。4月9日(火)大賞作品が発表されます。

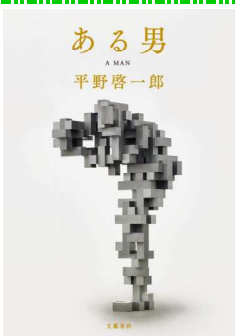


『愛なき世界』(三浦しをん)



身近でありながら、改めて考えると奥が深い植物の世界にのめりこむ登場人物たち。そして、普通の人が一風変わった植物学研究者に恋をしてしまうとどうなるのか……？

『ある男』(平野啓一郎)



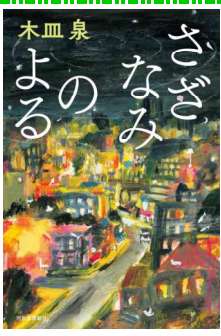
夫であったはずの男は、まったく違う人物であった……。人はなぜ人を愛するのか。幼少期に深い傷を負っても、人は愛にたどりつけるのか。

『ひとつむぎの手』(知念実希人)



大学病院で過酷な勤務に耐えている平良は、医局の最高権力者赤石教授に、研修医の指導を指示される。彼らを入局させれば、念願の心臓外科医への道が開けるが、失敗すれば……

『さざなみの夜』(木皿泉)



小国ナスミ、享年43。その死は湖に落ちた鞆の波紋のように家族や友人、知人へと広がる。悲しいだけではなく、人生にあたたかさや希望をくれる物語。

『ひと』(小野寺史宣)



両親を亡くし、大学をやめた二十歳の秋。見えなくなつた未来に光が射したのは、コロッケを一個、譲つた時だった――。

『熱帯』(森見登美彦)



森見登美彦氏はある日、奇妙な催し「沈黙読書会」で出逢つた女性が口にした「この本を最後まで読んだ人間はいないんです」という言葉の真意を探る「ヘンテコな」旅にでる。『意を探る「ヘンテコな」旅にでる。』(角沢央)

『火のないところに煙は』(芦沢央)



神楽坂を舞台に怪談を書きませんか。解けない謎、救えなかった友人、そこから逃げ出した自分。そして導かれる最恐の真実。

『ラーガはユーガ』(伊坂幸太郎)



常盤優我は仙台市のファミレスで一人の男に語り出す。双子の弟・風我のこと、決して幸せでなかった子供時代のこと、そして、彼ら兄弟だけの特別な「アレ」のこと。

『バトン』(瀬尾まいこ)



血の繋がらない親の間をリレーされ、四回も名字が変わつた森宮優子、17歳。だが、彼女はいつも愛されていた。身近な人が愛おしくなる物語。

『ベルリンは晴れているか』(深緑野分)



1945年7月。ナチス・ドイツが戦争に敗れ米ソ英仏の4カ国統治下におかれたベルリン。何もかもが傷ついた街で少女と泥棒は何を見るのか。